

# 子どもの貧困

## シングルマザーからの相談や子どもたちへの支援の現場から

NPO法人しんぐるまざあず・ふぉーらむ理事長

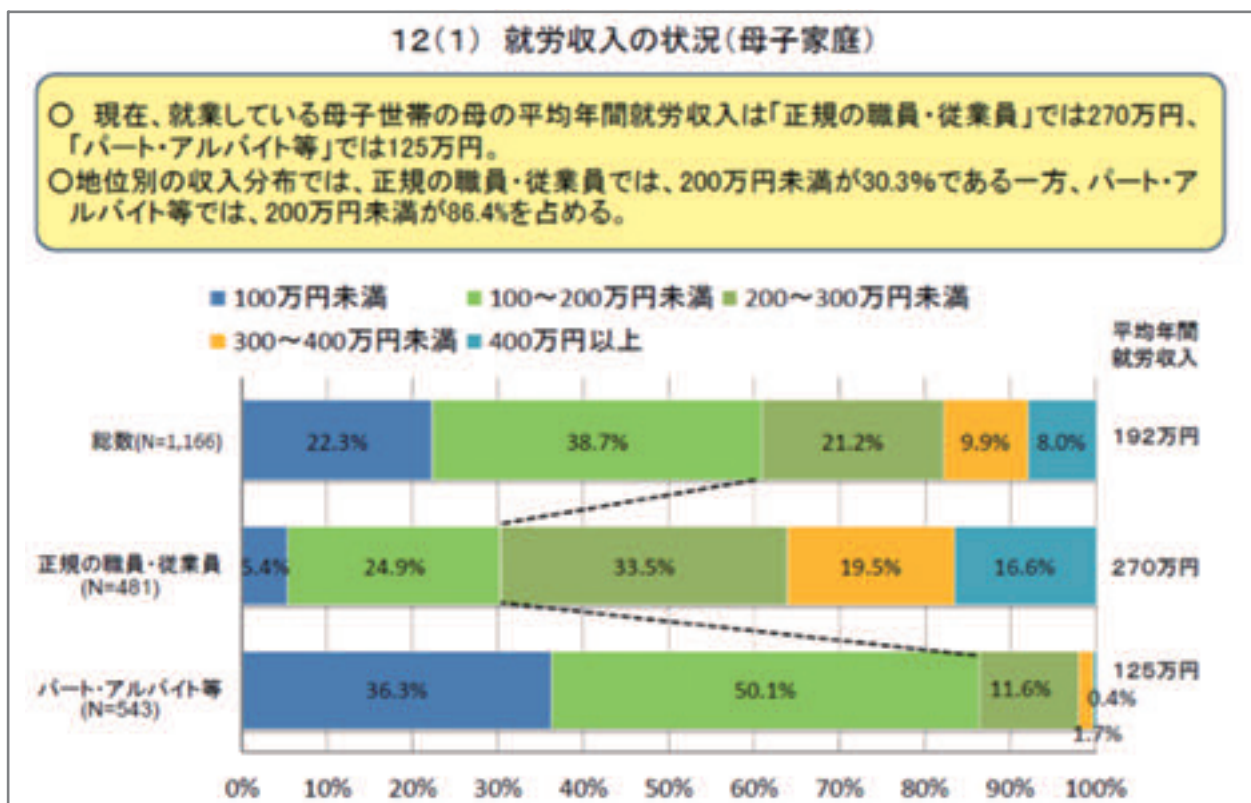
赤石 千衣子

『ひとり親家庭』という本で「ひとり親家庭の子どもをひとり立ちさせる力がとても弱まっている」と伝えた。それはひとり親家庭が貧困であることと大きな関係があるのだと思う。教員の方たちと話すと、心ある先生たちが、遠足にお弁当を持ってこない子にそっとコンビニで買ってきたおにぎりを渡したり、頭にシラミがわいていてお風呂に入ってこない子の頭を洗ってあげたなどの話が出る。却ってそうした子どもたちの学校での様子を私たちが知っているわけではない。しかし、ひとり親家庭の経済状況や子どもたちのインタビューから見えてきたこ

とを伝えたい。

### シングルマザーの貧困

ひとり親家庭、特にシングルマザーは今どんな経済状況で暮らしているのだろうか。平均の年収は223万円という数字がある（厚生労働省、全国母子世帯等調査）。223万円というのは、児童扶養手当という手当や、養育費や、遺族基礎年金や厚生年金などをすべて足した数字である。仕事から得られる収入は平均181万円にしかない。



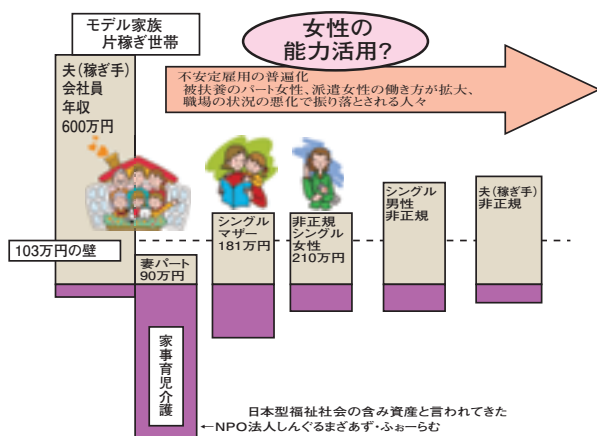
(平成23年度 全国母子世帯調査結果から)

非正規労働者が増えていると言われている。特に女性の場合には非正規労働者は働く女性の半分以上、57%に上る。シングルマザーは約8割が働いているのだが、半分以上が非正規労働者なので

収入は少ない。契約社員、準社員、パート、アルバイト、派遣労働者である。そもそも、中年の女性には新卒で働き続けてこない限り、非正規の仕事があてがわれてきた。それは男性が稼ぎ主で女性は

補助的な労働でよいという「男性稼ぎ主システム」が賃金や生活保障にわたって貫かれているからである（図参照）。

### 男性稼ぎ主システムが女性の貧困を招く



筆者作成

離婚後、仕事を探し9時～5時で正社員になれないかと思っている母親たちは希望をくじかれる。あるいは子どもと暮らし始めたシングルファーザーは、しばしば長時間働いており、育児や家事をする時間がなく、親族の助けを得るかあるいは転職して短時間でいい仕事に就かざるをえない。

最近待機児童が都市部で増え、そのために働けないなどの悩みを抱えるひとり親が増えている。シングルマザーは優先であるとはいっても、求職中であればポイントは低く順番が回ってこないことも多い。となると高い認可外に預けるか、あるいは託児付きの仕事を見つける。託児付きの仕事の中には、ヤクルトの販売などの仕事もあるがもっと収入を得たいと思うとキャバクラなどの寮や託児付きの仕事も選ぶ人が増えている。

時間あたりの収入がよいので、性風俗で働くシングルマザーもいるが、うつなどで長時間働けないからこそそうした仕事に就く人もいる。性風俗といっても夜だけではない。昼間保育園に預けながら働く人もいる。そんなシングルマザーの悩みは「人に自分の本当の仕事が言えない」「履歴書に空白ができる」「確定申告がしにくいので課税証明書が出しに

くい」などである。真面目な人も多く、そうした一つひとつにひっかかってもっと生きにくくなっていたりする。確定申告をしていないため課税証明書がなく、就学援助の手続きができない人の中にそういう人がいるのかも、しれない。

## ひとり親の子どもたち

お金がないだけではない。時間も足りない。ワークライフバランス、仕事と生活の調和、という言葉がある。しかしひとり親にとってはワークライフバランスは至難の業だ。女性たちは仕事と家庭の両立のために、短時間のパートなど補助労働に就いて来たわけだが、それでは収入が確保できないので、シングルマザーはパートのかけもちか残業も引き受ける契約社員になったりするわけで、長時間働かなければ生活していくだけの収入は得られない。

時間がないことは共働きの親にも共通の悩みでもあるだろう。だが、お金で処理することができないのがひとり親の状況である。たとえば家事を外部委託することもできない。子どもがひとりで過ごす間家庭教師やベビーシッターを頼むこともできない家が多い。

生活習慣が身につけていない子どももふたり親よりは多くなる。遅刻も増える。

——学童から6時くらいに帰ってきて、ずっとテレビ見て、お菓子とか食ってた。8時にお母さん帰ってきてからごはん…だから、なんか夜遅かったですね。寝るのも遅いし、そうなる朝起きれないし。しょっちゅう遅刻してましたね。(中略)小学校のときは、お菓子食べて、部屋ちらかして怒られて。家帰って来たらさんざん怒られ、毎日繰り返してた。仕事で疲れて帰ってきて、部屋が汚れてて、そりゃ怒るかな、と思う、今思えばですけどね。(怒られて)泣き寝入りしたこと

とかしょっちゅうでしたね。(しんぐるまざあず・ふぉーらむ編『母子家庭の子どもたち』2003年 より)

ひとり親の子どもたちは「親がひとり」なだけではなく、その親が「稼ぎ主」なので「仕事中心」にならなければ食べていけない現実に直面し、親と接する時間が短くなる。

そんな働いている親がよく嘆いているのは、子どもを寝かせるころになって、明日もってくるもの、集金などのプリントが「蛇腹状になって」カバンの底から出てくるということである。働いている親は「学校は母親はみな専業主婦だと思っているのか」と恨めしく思いながら、準備をし、小銭がなければコンビニに走る。

さらにこんな偏見に遭うこともある。私事で恐縮だがある日集金を息子に持たせたとき、クラス委員をしている隣の子が集金初日にもってきていなかった。すると担任はクラス委員の子がもってきて我が家は忘れたはず、集金袋を配り間違えたのだとあらぬ誤解した。私は驚くと同時に「母子家庭の母親は集金を忘れるだらしない親」だと教員は見るんだと思いき知らされた。

そのほか、保護者の嘆きには「保護者が仕事と重なってしまう」「宿題をみてやる時間がない」「持ち物提出物の通知が急である」などがある(『母子家庭の仕事と暮らし』)。

親たちの意見で多いのは学童が預かってくれなくなる小学校4年からの不安、夏休みの不安が大きい。夏休みにキャンプなどに行ける財力があればいい。私はなかなか行かせられなかった。放課後習い事で時間を埋める親も多いが、ひとり親の場合経済的にもなかなかむずかしい。放課後の子どもの活動に力を入れているNPOもでき始めたが、まだまだである。そもそも夏休みにどこにも連れていけないような親もいる。

## 学校の行事やPTA

また地域によっては学校の行事や地域の当番のために、子どもをひとり家に置いておかねばならない悩みも語られている(しんぐるまざあず・ふぉーらむ編『母子家庭の仕事と暮らし』)。

さらに大きな悩みはPTAだ。PTAに参加して仲間をつくれたのでよかった、というシングルマザーがいる一方で、PTAの役員決めについて理不尽な思いをしたひとり親も多い。シングルマザーは休みを取って平日昼間にPTAに参加することはむずかしい。役員選考でフルタイムのひとり親であることを伝えても考慮してもらえず、くじ引きで当たってしまい、しかも欠席の父子家庭は免除されたため、怒りで眠れなかったと訴えてきた人がいた。そのためPTAの退会を考えたという。PTAが親の事情を考慮しながら運営されるのが望ましいのだがなかなかそうはならない。

## 学校社会からの排除

子どもたちは母子家庭であることで「かわいそうがられること」がキライである。だからあまり母子家庭であることを言わない子もいる。またこうした学校生活との間での葛藤を通して意識されるのは、学校社会がひとり親に理解をあまり示さないということである。

「お父さんの絵を描きましょう」と幼稚園で言われて困ったなど様々な家庭があることがなかなか理解されていない場合がある。

――学校でいやだったのは、親のことを記入した書類を出すとき、先生に直接渡すのではなく後ろから表にして重ねて集めるので親のことがわかってしまうことだった。とてもいやだった。高校のときもあった。(田所瑠璃子さん・仮名)

インタビューから『母子家庭の子どもと教育』より)

就学援助は給食費や学用品の補助がされるので教育の支えになる制度である。しかしその申請方法についても、全国で方式はまちまち。少数だが民生委員の証明がある地域もあり、申請をためらう地域もある一方、全員に用紙を配布し全員からまた書類を封に入れて回収する方法をとっていた学校では安心して書類が提出できた。こうした配慮を全国の学校で行ってほしいのだ。

不登校についてもひとり親特に母子家庭については多いという。日本労働研修・研究機構の調査によると、小学校以上の子どもを持つ世帯のうち、いずれかの子どもが不登校の経験をもっている(た)世帯の割合は母子世帯12.1%、父子世帯5.6%、ふたり親世帯3.8%となっていた。母子世帯が抱える子どもの不登校問題はかなり深刻である。

不登校になることは、その子どもたちにとっては身を守るために必要な行動でもあるので、それ自体を問題と見ることはできない。しかし、不登校の結果子どもはひとりで過ごす時間がもっと増える。しかし学校ではなかなかフォローは期待できない。

高校で不登校になった場合には、最近定時制よりも通信制の高校に通う子どもたちが多い。しかし通信のスクーリングは週に1回だけであとはレポート提出のみ。子どもたちが規則正しい生活リズムをつくることはとても難しい。通信制高校に通う子どもたちのためのサポート校もあるが、年間70万円もかかる。このサポート校に払い込んでも通わなかった子どももいる。

しんぐるまざあず・ふぉーらむでは、そんな子どもたちが通ってくる学習支援の場も細々とつくってフォローしている。子どもたちが、安心できる場であること

がわかった上で、不登校の原因となったいじめなどの苦しかった体験をぽつぽつと語り始めている。20歳になってやっと中学の英語を勉強している。それでもいい。そういうチャンスがあったことを喜んでいる。話を聞くことができる大人がいることで子どもたちが少しずつ心を開いている(そういう話を聞ける大人が増えてほしい)。

## 別居やDVなどわかりづらいひとり親

学校ではなかなかDVを振るわれていることや、別居していることなどがわからない。DVは子どもにも大きな影響を与える。不安定になったり、暴力的になったり、投げやりになったり、不登校になったり、ということがある。一方親も多重的な困難を抱える。仕事がなかなかみつからないなどの就労の悩みや、調停や裁判などの法律手続きに迷っている人もいる。離婚が成立していないと児童扶養手当はもらいにくい。

またDV後の子どもたちのケアのプログラムも最近やっとでき始めている。

別居やDV被害を受けている母の中にはやむを得ず給食費や国民健康保険料や保育料を払えず滞納額が多額になり困っている人もいる。

## 経済事情と教育

小学校のうちはともかく、中学生となると塾に行かないと勉強についていけないと言われるようになってきた。経済的な困難から塾に行かせられない親も多い。中学3年で塾に行かせると年間で40~50万円もかかることもある。年間就労収入が約200万円のシングルマザーにとって塾代捻出は大変な負担である。そのためにダブルワークをせざるをえない親もいる。東京都はチャレンジサポー

トという、塾費用の支援を始めているが年間20万円までである。この制度は教員が知らない場合も多い。

——高校受験をめざし塾には中学2年生の夏から通った。英語が苦手なので、夏期講習を受けたいと言ったら、お母さんも「いいよ」と言ってくれた。しかし、都立の入試の前まで、お母さんの帰りが遅い日が続いた。あとから、講習の費用を工面するために、通常の仕事のほかに、母の友達の居酒屋でバイトもしていたことが分かった。高2のころにこの話を聞いたときはショックだった。公立高校に合格、体育祭、文化祭、遠泳など行事が多く、都立なのにお金がかかった。都立なら塾を続けていいと言われて3年間英語だけ塾に通った。浪人しなければ大学に通っていいと言われて。(しんぐるまざあず・ふおーらむ編『母子家庭の子どもと教育』より)

親との葛藤があつて、家に居場所がなくなってしまった子どもたちもいる。あるいは親の恋人が毎日狭い家に来るために居場所がなくなる子どももいる。親が子どものつらさに鈍感になってしまっている部分もある。

またひとり親は貧困であるために子どもの虐待が多いことももう知られている事実である。社会的孤立も作用している。

## 進学費用と進路のこと

最近通信に通う高校3年生の娘が英

語の専門学校に通いたいと言っているので奨学金を借りたいと言ってきたシングルマザーがいた。正直私は慌てた。英語の専門学校で得られる資格は民間の英語を教える資格であり、年間100万円くらいの学費を払っても将来の就職にはつながらないと思われたからだ。そこで、「英語で幼い子を教える先生は自立できる収入は得にくい」「国家資格の保育資格などのほうが潰しが効く」「学校に通いながらアルバイトをする生活はどんな暮らしか想像してみて」など説明した。この母は専門学校の就職実績を鵜呑みにし、自分が幼稚園の先生になりたくてもなれなかった思いを娘に託して希望を叶えてやりたいと言う。しかし卒業時に400～500万円の借金を負うのに自立に役立たなかったら困る。

奨学金がサラ金のようなローンとなっていると指摘されている。さらに子どもの適性を考えながら、ひとり立ちできるだけの進路をアドバイスすることが必要である。その両方が今不足しているために、二重の苦難があるのだ。

子どもたちの状況はまだまだ伝えるべきことがある。ひとり親家庭への支援制度の充実とともに、学校社会が貧困な子どもたちにとって居心地のいい場所になってほしい、そう感じている。

(NPO法人しんぐるまざあず・ふおーらむ理事長。近著に『ひとり親家庭』岩波新書がある)

### Profile 赤石 千衣子

しんぐるまざあず・ふおーらむ理事長。

1955年東京生まれ。非婚のシングルマザーになり、シングルマザーの当事者団体の活動に参加。その後婚外子差別の廃止や夫婦別姓選択制などを求める民法改正の活動、反貧困ネットワークにかかわる。反貧困ネットワーク副代表。

社会的包摂サポートセンター運営委員。

『ふえみん婦人民主新聞』元編集長。

編著書に『母子家庭にカンパイ!』『シングルマザーに乾杯!』『シングルマザーのあなたに』(以上、現代書館)、『災害支援に女性の視点を!』(共編著、岩波ブックレット)ほかがある。